

柳沢

宮沢賢治

林は夜の空気の底のすさまじい藻^もの群落だ。みんな
だまつて急いでゐる。早く通り抜けようとしてゐる。

俄^{にはか}に空がはつきり開け星がいっぱい耀^{きら}めき出した。
たゞその空のところどころ中風にでもかかったらしく
変に淀^{よど}んで暗いのは幾片か雲が浮んでゐるのにちがひ
ない。

その静かな微光の下から烈^{はげ}しく犬が啼^なき出した。
けれども家の前を通るときは犬は裏手の方へ逃げて
微^{かす}かにうなつてゐるのだ。

一寸^{ちよつと}来ない間に社務所の向ひに立派な宿ができた。

ランプが黄いろにとぼつてゐる。社務所ではもう戸を閉めた。

（こんや、二時まで泊めて下さい。四人です。たいまつがありますか。わらぢがありますか。それから何かよるのたべものがありますか。ほう、火がよく燃えているな。そいぢや、よござんすか。入りますよ。）

（さあ、二時までぐつつすりやるんだぜ。ねむらないとあしたつかれるぞ。はてな、となりへ誰たれか来てゐるな。さうだ、土間に測量の器械なんか置いてあつた。）

青いきらびやかなねむりのもやが早くもぼんやり

かゝるのに誰かどしどし梯子はしこをふんでやって来る。隣りの室へやをどんと明ける。

「やあ旦那だんなさん。ぶん葡萄酒ぶんどしゆ一杯やりなさい。」

「葡萄酒ぶんどしゆ? 葡萄酒ぶだうしゆかい。お前がつくった葡萄酒かい。

熱あたためてあるのかい。」

「まあ一杯おあがりなさい。さうです。アルコールを入れたのです。」

「アルコールを入れたのか。あとで? 作ってか
ら?」

「さうです。大丈夫ですよ。本当のアルコールです。
見坊獣医けんぼうから分けて貰もらったのであります。」

「どうして拵へたんだい。野葡萄を絞ってそれから？」

「いゝえ、あとで絞るのです。まあ、おあがりなさい。大丈夫であります。」

「さうか。そんなら貰はうか。おっと、沢山だよ。ふん、随分入れたな、アルコールを。」

「ずるぶん瓶を沢山はじけらせました。」

「ふん。」

「砂糖を入れないでもやっぱり醸きます。」

「さうかい。砂糖を入れたら罰金だらう。おい、吉田、

吉田。吉田を呼んで来て呉れ、あ、いゝよ、来た来た。おい吉田。葡萄酒ださうだ。飲まないか。」

「さうですか。おや。熱くしてあるのか。どれ、おい沢山だ。渋いな。」

ねむけのもやがまた光る。

「あしたは騎兵が実弾射撃に来るさうぢやないか。どこへ射つのだらう。」

「笹森山、地図を拝見、これです。なあに私等の方は危くありませんよ。」

「しかし弾丸が外れたら困るぜ。」

「なあに、旦那さん。そんなに来ません。そいつさ騎兵だん「#「ん」は小書き」すぢやい。」

ふん、あいつはあの首に鬱金うこんを巻きつけた旭川あさひかはの兵隊上りだな、騎兵だから射的はまづい、それだから大丈夫外それ弾丸は来ない、といふのは変な理窟りくつだ。けれどもしんとしてゐる。みんな少し酔って感心したんだな。

「今日は君は楽だったらう。」

「え、しかし昨日は鞍掛くらかけでまるで一面の篠笹しのざさ、とても這はふもよぢるもできませんでした。」

「いや、おれの方だつてさうだ。さあ寝るかな。あしたは天気は大丈夫だな。四つまでできるかな。」

「えゝ。」

「やつ、お邪魔しあんした。まだ入つて居をります。置いて行きます。」

「おい、持つて行け、持つて行け、もう飲まんぞ。」
さうだ。帝室林野局の人たちだ。

たしかにこれは夢のはじめの方の青ぐろい空だ。山の中腹から裾野すそのに低く雲が垂れ、その星明りの雲の原の上でごろごろと雷が鳴つてゐる。実に静にうなつて

ゐる。夢の中の雷がごろごろごろうなつてゐる。
雲の下の柏かしはの木立に時々冷たい雨の灌そそぐのが手に取るやうだ。それでもやはり夢らしい。

何時かな。もう二時半だ。少しおくれた。いや、丁度いゝ。寒い。

(おい。もう二時半だ。二時半だ。行かう行かう。) 寒くてガタガタする。みんなうらうら仕度をしてゐる。ゆふべのつゞきの灰色ズツクの鞆かばん、ラムプの光は青い孔雀くしやくの羽。

(いゝか。火がついたか。さあ出よう。たいまつはま

ん中だぞ。寒いな。）

空の鋼は奇麗に拭はれ気圏の淵は青黝ぐろと澄みわたり一つの微塵も置いてない。

いっぱい星がべつべつに瞬いてゐる。オリオンがもう高くのぼつてゐる。

（どうだ。たいまつは立派だらう。松の木に映るとすごいだらう。そして、そうら、裾野と山が開けたぞ。

はてな、山のとつぺんが何だか白光するやうだ。何か非常にもの凄^{すし}い。雲かもしれない。おい、たいまつを一寸うしろへかくして見ろ。ホウ、雪だ、雪だ。雪だよ。雪が降つたのだ。やっぱりさつき雨が来たのだ。

夢で見たのだ。雪だよ。）

空気はいまはすきとほり小さな鋭いかけらでできて
る。その小さな小さなかけらが互にひどくぶつつか
り合ひ、この^{りんくわう}燐光をつくるのだ。

オリオンその他の星座が送るほのあかり、中にすつ
くと雪をいたゞく^{せんわう}山王が立ち黒い大地をひきみながら
今^{はて}涯もない空間を静にめぐり過ぎるのだ。さあみんな、
祈るのだぞ、まっすぐに立て。

（無上^{じんじんみめう}甚深微妙法 百千万劫^{ひゃくせん}難遭遇

我今見聞得受持 願解^{にょらい}如来第一義）

力いっぱい声かぎり、夜風はいのりを運び去りはるかにほるかにオホツクの黒い波間を越えて行く。草はもうみんな枯れたらしい。たいまつおほぐまほしの火の粉は赤く散り、大熊星は見えません。

(ここのとこでよく間違ふぞ。左を行くと山みちなんだ。鳥居があるので悪くするとそっちへ行くぜ。) みちは俄にはかに細くなったり何本にもわかれたり。黒い火山礫くわざんれきと草のしづく。

(いつもなら火を見て馬がかけて来るんだが今はもうみんな居ないんだ。すっかり曇ったな。)

みちが消えたり又ひよいと出て来て何本にも岐わかれた

り。

柏かしはの枯れ葉がざらざら鳴ってる。

なんだか路みちが少しをかしい。もう大分来てゐるのだが。

（向ふにどてがあるかどうか一寸ちよつと見て来よう。おい。ついて来るな。そこに居ろ。何だ。たいまつが消えたな。そこに居ろよ。はなれるな。ずゐぶん丈の高い草だ。胸きりある。）

（どてが無いよ。この路に沿ってゐる筈はずなんだ。事に

よつたら間違つたぞ。もう少し行つて見よう。けれども駄目だ。やっぱり駄目だ。こんな変な坂路がなかつた筈だ。少し北側へ廻つたのかな。すっかり曇つたし、困つたな。仕方ない夜明け迄までに一ぺん宿へ引つ返し日が出てから改めて出掛けよう。

（けれども一寸路をさがして来よう。何とか抜けられるかも知れない。曇つてさへ居なかつたら見当だけつけてぐんぐん本当のみちの方へ草をこいで行けばいゝんだが。仕方ない。ますます変な所へ来てしまった。やっぱり駄目だ。さあ引つ返しだぞ、戻りだぞ。やあ、降つて来た降つて来た。マントのあるのは誰々だ。さ

あ馳^かけるんだぜ。いゝか。そら。大きな岩だ。つまづ
くな。）

（ふん、あれがさつきの柳沢の杉だ。

何だ沼森の坊主め。ケロリとして睡^{ねむ}ってやがる。）

所々雲が切れて星が新らしく瞬く。

（ははあ。こゝだ。こゝで間違つたんだ。仕方ない。
まあ行つて火をたかう。）

山だけまだ雲をかぶつてゐる。

（おい。上等のお菓子だぜ。一つづつ分けるぞ。もう
ぢきだ。もう十五分。）しかし宿でも迷惑だな。

（路を間違へて帰つて来ました。火をたきますよ。みんなきものを乾かせ。辛いな。けむりが。）辛い。けむり。それにきものが乾かない。烟けむりがみんなそつちへばかり行く。ぱつと燃えろ。さあ、ぱつと燃えろ。

（ああ、もう明るくなつて来た。空が明るくなつて来た。きれいだなあ。おい。）

深い鋼青から柔らかな桔梗ききやう、それからうるはしい天の瑠璃るり、それからけむりに目を瞑つむるとな、やはりはがねの空が眼めの前一面にこめてその中に入るいろいろのくの字が沢山沢山光つてうごいてあるよ。くの字が光つて

うい)……。)

もうすつかり暁だ。

(お握りを焼かう。はあ、ゆふべはどうも。途中で迷つて。雨は降るし。)

(さあ日が出たやうだ。行かう行かう。さあ飛び出すんだよ。おゝ、立派、この立派。ふう。)

日の光は琥珀こはくの波。新らしく置かれたみねの雪。赤々燃える谷のいろ。黄葉をふるはす白樺しらかばの木。

モッサアゲート
苔瑪瑙。

(おゝい。あんまり馳かけるな。とまれ。とまれえ。
おゝい。止れつたら。待てつたら。)

うん。朝の怒りは新鮮だ。炭酸水だ。

鈴蘭すずらんの葉は熟して黄色に枯れその実は兔うさぎの赤めだ
ま。そしてこれは今朝あけ方の菓子すずがみの錫紙すずがみ。光つてゐ
る。

底本…「新修宮沢賢治全集 第十四卷」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力…林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。